

神水鏡

棟方有紀

町に昔からある鬼切神社の裏に、鏡清水と呼ばれる直径二尺ほどの湧水がある。言い伝えでは神無月の満月の夜、この水面を反時計回りにかき混ぜて覗くと未来の自分が映るらしい。そう祖母が教えてくれた。

「でもよつ、どんなに怖い未来でも最後まで見なくちゃなんねえぞつ。」

「何だよ。もし途中でやめたらどうなるつちゃ？」

「そうさなあ、そんなときは鬼に喰われるな。」

「いやだあ、ばつちゃ、おどかさねえでよお。」

その日から私は、鏡清水のことばかり考えていた。いよいよ明日が十一月の満月、

「ばつちゃ、明日は満月よお。」

「やめときなあ、先のこととは知らねえ方が良いこともあるつちゃよ。」

「でもよお、私は知りていのさつ。」

祖母は何も応えなかった。その夜、私は意を決し、鏡清水の前に立った。きつと私の未来は明るい筈だ。根拠のない自信を胸に、祈る気持ちで神水をかき混ぜた。

すると水面が鏡のようになり、映画でも観ているかのように、映像がうかんだ。希望する高校に見事合格、喜ぶ場面がまず映った。次に場面が変わり、言い争いをする両親、そして母が家を出ていく場面に私は混乱した。「かあちゃん？」水面は波立ち、場面はまた変化した。「何だこれは？」すると頭の中で誰かが叫んだ。「逃げちゃなんねえよお。最後まで見るこつちゃつ、頑張れえ。」

祖母の声だ、祖母が踏みとどまらせてくれた。再び水面を覗くと、私の両手は血で真っ赤に染まっていた。

「もうやめたい、ごめんさい、誰か助けてえ。」

気が付くと私は、鏡清水の横で倒れていた。どれくらい時間が経ったのか、私は自分の未来を最後まで見ることは出来たのだろうか？急に恐ろしくなった。未来を知った自分、今は絶望しかない。

「止めておけばよかった、いや待てよ、未来を変える方法はまだあるかもしれない。」

背後から気配を感じて振り向くと、祖母の姿に似た何かが立っていた。

「尊よお残念だ、けどようやくこの日が来た。」